



史跡 齋宮跡

第37—4次 発掘調査報告

1985.3

明 和 町
三重県齋宮跡調査事務所

序

「まぼろしの宮」と称された齋宮跡は、10年余りの発掘調査の結果、その姿を徐々に現わし、昭和54年3月国指定となりました。以来、着実に調査が進められてきましたが、平安時代の文献『延喜式』に記載されている齋宮寮の組織に関する物証が得られず、今一つ、強い裏付けがなかったわけであります。

ところが、宅地開発に伴う西前沖地区の事前調査により、突如、「水司鴨□」の土器片が出土しました。この事実に町をはじめ、各関係機関は「齋宮寮13司の1つ、水司の存在を実証し得たこと、さらに中央官制の主水司と同様に水司に鴨氏が深く関与していたことが明確になった。」と、高く評価し、地道な発掘調査の結果と賞讃されたのであります。その後、調査地の保存保護については、国（文化庁）、県、町、原因者により鋭意検討され、現在、土器片出土箇所付近の公園化をはかり、その他については盛土により保護されております。

ここに貴重な調査結果を報告書として発刊出来ましたのも、調査地の提供及び調査経費を負担していただいた日本経木工業株式会社、また、調査担当された県齋宮跡調査事務所、並びに関係各位のご協力とご支援の賜と深く敬意と感謝を申し上げます次第であります。

昭和60年3月

明和町長 辻 英 輔

目 次

I 序 章

調査の経過と概要	1
----------	---

II 遺 構

(1) 奈良時代後半の遺構	3
(2) 奈良時代末葉～平安時代初頭の遺構	5
(3) 平安時代中葉の遺構	5
(4) 平安時代後半の遺構	8
(5) 平安時代末葉の遺構	8
(6) 鎌倉時代の遺構	10
(7) 鎌倉時代以降の遺構	12
(8) 時期不明の遺構	12

III 遺 物

(1) 主要遺構出土遺物	14
(2) 平安時代末葉における土師器の様相	26

IV 結 語	27
--------	----

図 版

- | | | | |
|-------|---|---------|--|
| PL. 1 | 南半部全景
南東部全景 | PL. 5 | 北半部全景
SD 5, SD2415~SD2418,
SF2419 |
| PL. 2 | 南西部全景
SB2486, SB2487, SB2488 | PL. 6 | SF2419, SF2427
SD2425, SD2426, SF2427 |
| PL. 3 | SB2486, SB2447, SB2448,
SB2449, SB2450 | PL. 7 | SB2479
団地内小公園に立つ説明板 |
| PL. 4 | SB2443
SB2468 | PL. 8~9 | 遺物写真(1:3) |

挿 図

- | | | | |
|---------|---------------------------|---------|-----------------------------------|
| fig. 1 | 斎宮跡位置図(1:50000) | fig. 12 | SE2460出土土器, 斎串実測図 |
| fig. 2 | 調査区位置図(1:5000) | fig. 13 | SD2474, SK2456, SK2458出土
土器実測図 |
| fig. 3 | 第1次調査風景 | fig. 14 | SK2480出土土器実測図 |
| fig. 4 | 第2次調査風景 | fig. 15 | SK2470出土土器実測図 |
| fig. 5 | 遺構配置図(1:500) | fig. 16 | SK2444, SK2467, SK2481出土
土器実測図 |
| fig. 6 | 掘立柱建物(1:200) | fig. 17 | 各遺構出土土器 |
| fig. 7 | 井戸SE2460近景 | fig. 18 | SD2475出土土器実測図 |
| fig. 8 | 調査中の井戸SE2460 | fig. 19 | SK2482出土土器実測図 |
| fig. 9 | 三面廂付掘立柱建物(1:200) | fig. 20 | SE2452出土土器, 曲物実測図 |
| fig. 10 | 溝, 道路土層断面図(1:50) | | |
| fig. 11 | SB2441, SK2450出土土器実
測図 | | |

表

- tab. 1 竪穴住居, 掘立柱建物規模表

例 言

1. 本書は、多気郡明和町に所在する国史跡齋宮跡の大字齋宮字西前沖2604番地で実施した発掘調査報告である。
2. この調査は、日本経木工業株式会社（伊勢市吹上町2丁目2-32、代表取締役小島達雄氏）の宅地開発に伴う事前調査として、明和町が委託をうけ、三重県齋宮跡調査事務所がこれを担当した。
3. 調査は、齋宮跡第37-4次調査に該当し、調査期間は昭和56年7月17日から12月25日まで、調査面積は約4,700㎡である。
4. 調査には、三重県齋宮跡調査事務所の山沢義貴、大西素行、吉水康夫、倉田直純があたり、岩中美絵子がこれを補佐した。また、日本経木工業株式会社がこれに協力した。
5. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準とし、方位の標示は座標北を用いた。
6. 遺構標示記号は次のとおりである。
SB ; 建物 SK ; 土壇 SD ; 溝 SE ; 井戸 SA ; 柵 SF ; 道路
7. 本書の執筆・編集は、三重県齋宮跡調査事務所の佐々木宣明、山沢義貴、谷本鋭次の指導のもと、倉田直純が担当した。

I 序 章

調査の経過と概要

昭和54年3月、齋宮跡が国史跡に指定されて以来、史跡内における現状変更等はすべて許可申請書を文化庁に提出し、文化庁長官の許可を受けてきている。特に個人住宅の新築や遺構に影響を及ぼすおそれのある現状変更については、事前調査を実施し、遺構状況を確認したうえで保存措置が検討されている。

こうした中で、昭和55年7月、日本経木工業株式会社から管理団体である明和町を經由して、約4,700㎡という大型の現状変更許可申請書が提出された。これは、国有地払い下げによって得られた土地を民間が宅地開発しようというもので、申請箇所は、宮域の北東部、齋宮字西前沖に位置し、齋宮の北限の一つの根拠となった鎌倉時代の大溝が東西に走ることが予想される場所であった。

また当該申請地は、齋宮跡保存管理計画に示されている土地利用区分の中で準住宅地区(D地区)に該当し、土地の公有化は原則として行わず、現状変更は原則として認める地区となっていた。そのため、国(文化庁)、県、町とも慎重な協議のうえ、第1次調査を実施し、その結果をみて今後の対処を再度協議することとなった。

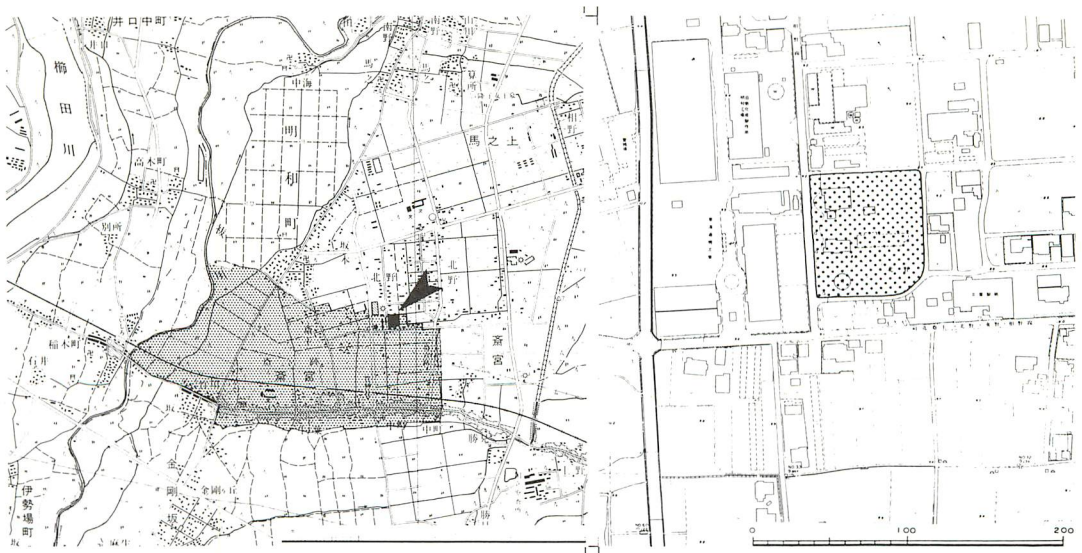


fig. 1 齋宮跡位置図(1:50000)

fig. 2 調査区位置図(1:5000)

第1次調査は、昭和56年5月13日から6月中旬にかけて行い、幅4mのトレンチを南北に3条設定。総延長210mにわたり、重機で表土を除去した後実施した。

調査の結果、当初の予想通り、鎌倉時代の大溝をはじめ、平安時代の掘立柱建物や、これに伴うものと思われる土壇等を多数検出。遺構が現状変更申請地全面に及ぶことが確認された。そこで再度、その取り扱いについて文化庁の指導を得ながら、昭和56年7月、県・町・原因者（日本経木工業株式会社）の三者で協議がもたれ次のことが確認された。1)第2次調査（本調査）を申請地全面に対し実施する。2)明和町が調査主体となる。3)調査は三重県斎宮跡調査事務所が担当する。4)調査費用は日本経木工業株式会社が負担する。5)調査後の措置については、文化庁の指示に従う。6)その他疑義が生じた場合は三者で協議する。以上のような条件で本調査が実施されるに至った。

本調査は、掘立柱建物が多く検出された南半分と、溝が多く検出された北半分との2地区に分け、南半分を昭和56年7月17日から9月14日にかけて実施し、北半分を昭和56年10月5日から12月25日にかけて実施した。



fig. 3 第1次調査風景



fig. 4 第2次調査風景

II 遺 構

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、表土→暗褐色土→暗茶褐色土→地山で地表より50cmで地山に達する。遺構は一部後世の攪乱を受けているものの比較的残存状況は良好であった。

検出した主要遺構には、奈良時代後半の竪穴住居1戸をはじめ、奈良時代末葉～平安時代初頭頃の掘立柱建物1棟、平安時代中葉の掘立柱建物9棟、平安時代末葉の掘立柱建物8棟のほか、鎌倉時代の古道や、各時期の土壇、溝、井戸などがある。以下、遺構の時期及び種類毎にその概要を述べることにする。

(1) 奈良時代後半の遺構

竪穴住居

S B 2441 調査区北西部にある一辺 3.6m、深さ20cmの小規模な建物で、東壁ほぼ中央部にカマドをもつ。四隅の支柱穴は認められない。埋土から奈良時代後半期の土器が少量出土している。

土壇

S K 2439 S B 2441のすぐ南側に位置し、3.2m×1.7mの楕円形を呈する土壇で、深さは20cmと浅い。S K 2440と重複するが、出土遺物から時期差は考えられない。

S K 2440 5.2m×2.0mの東西に細長い土壇。深さは30cmと浅く、奈良時代後半期の土器が少量出土している。

S K 2450 調査区中央部にある、5.2m×2.8mの南北に長い楕円形土壇で、深さは15cmである。土壇埋土内より今回最も注目される「水司鴨□」というへら描きされた土器のほか、「大」とへら描きされた土器も3点出土している。しかし、土壇の広さの割には出土遺物に乏しく、土師器杯・皿・甕・甑等の土器類が少量出土したにとどまる。

S K 2459 調査区中央部にある不整形な土壇で、北側をS K 2461に切られる。奈良時代後半期の土器が少量出土した。

溝

SD2410 調査区北西隅にある東西溝。溝幅1m前後で深さも一定しておらず不整形なものである。

SD2412 調査区北西隅にある南北溝。幅1.2m、深さ20cmで北の調査区外へまっすぐ延びる。溝の南端はSD2416やSD2417などに切られる。

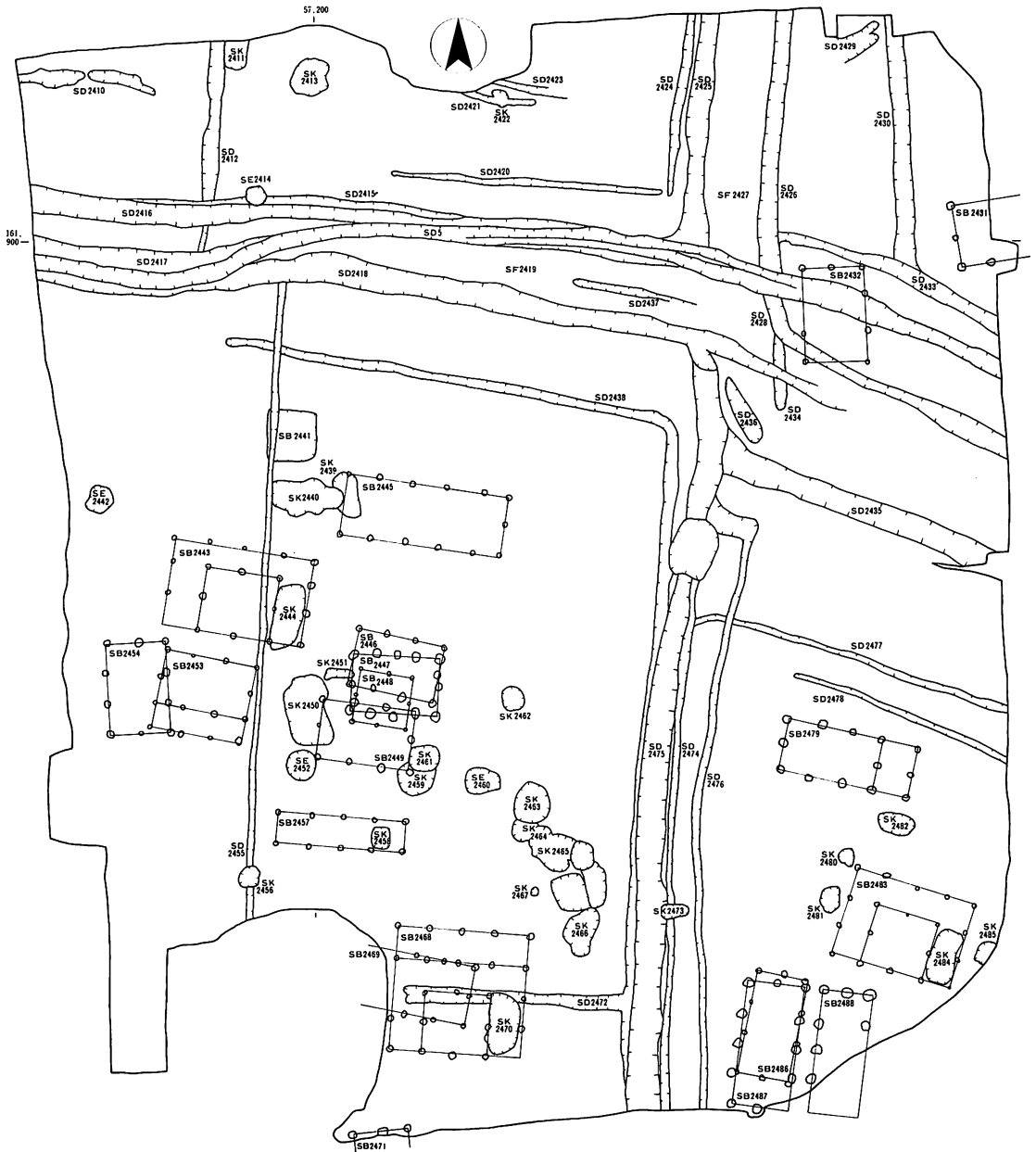


fig. 5 遺構配置図(1:500)

(2) 奈良時代末葉～平安時代初頭の遺構

掘立柱建物

S B 2447 調査区中央部にある東西棟建物。桁行4間(6.3m)、梁行2間(4.1m)で、桁行柱間が1.58m等間と極端に狭い。柱掘形は一辺50cm～80cmの不整形を呈しており、比較的大型である。

土壇

S K 2413 調査区北西部にある径2.6mほどの不整形土壇で、壇底はでこぼこしており、多数の小穴の集合体からなる。

S K 2461 掘立柱建物S B 2447のすぐ南側に位置する。2.2m×1.8mの方形を呈し、深さ30cmである。埋土から土師器杯・皿の細片が少量出土している。

S K 2462 掘立柱建物S B 2447の東側に位置する径1.8m、深さ20cmの円形土壇。

S K 2463～S K 2466 調査区南部に不整形土壇が連続して切り合う土壇群である。出土遺物はごく少量で、中には全く出土遺物のない土壇もある。各土壇間の切り合いは、明確に認められなかったが、時期的に大きな差はないものと思われる。おそらく廃棄物の捨て場所が一定の場所に限定され、意識されていたものであろう。

溝

S D 2438 調査区中央部を逆L字形に走る溝で、南北に49m、東西に32m確認した。溝幅0.6m、深さ20cmを測る。南北溝はS D 2475により、溝の東肩の大部分を切られているが、さらに南の調査区外へ延びるものと予想される。東西溝と南北溝の交点は、直角に曲がらず、やや外へ開いて鈍角となっている。このS D 2438は、おそらく掘立柱建物S B 2447を区画した溝であろう。

(3) 平安時代中葉の遺構

掘立柱建物

S B 2431 調査区北東部にある東西棟建物。梁行2間、桁行2間分まで確認したが、さらに東の調査区外へ延びる。柱間は2.25m等間である。

S B 2445 調査区の中央部にある東西棟建物。桁行5間(11.7m)、梁行2間(4.4m)で、柱間は、それぞれ2.45mと2.2mであるが東の桁行1間分のみ1.8mである。

柱掘形は径40cm～50cmの円形で大型の部類には属さないが、平面規模は、この時期の建物の中では最も大きい。

S B 2449 S B 2445の南に位置する桁行3間(6.7m)、梁行2間(4.2m)の東西棟建物。柱掘形は、奈良時代の土壇S K 2450・S K 2459の埋土を切り、井戸S E 2452には切られる。西側妻柱通りをS B 2445の西側妻柱通りに揃えている。

S B 2454 調査区の西部にある3間(6.4m)×2間(4.3m)の南北棟建物。柱掘形は径50cm前後、深さ50cmである。

S B 2471 調査区南端部にある建物で、柱掘形を3個確認した。東西棟建物の可能性もあるが、ここでは南の調査区外へ延びる南北棟建物と考えた。梁行4.0m、柱間2.0m等間で、柱掘形は、一辺60cmの方形を呈し、比較的大型である。

S B 2479 調査区南東部にある東西棟建物。3間×2間の身舎に東の妻側に1間の廂が付く建物。あるいは間仕切りのある4間×2間の建物とも考えられる。柱掘形は一辺60cm前後の方形ないしは隅丸方形で、深さ60cmである。

S B 2486 調査区南東端部にある3間(7.5m)×2間(3.7m)の南北棟建物で、S B 2479と建物の方向をほぼ同じくする。東側柱がS B 2487の東側柱にすべて切られており、S B 2486が先行する。柱掘形は径40cmと小さく、深さ45cmである。

S B 2487 調査区南東端部にある4間(9.0m)×2間(4.1m)の南北棟建物。柱掘形は不整形で一辺70cm、深さ40cm前後である。一部の柱掘形に径20cmほどの柱痕跡が認められた。

S B 2488 S B 2487の東隣りに棟を並べて建つ南北棟建物。調査区外へ延びて全体の規模は不明であるが、S B 2487に比べて梁行を若干縮小したおそらく4間×2間(3.6m)の建物と考えられる。一部の柱掘形内にこぶし大の石が数個根固め石として用いられており、S B 2487と共に当地区では比較的大型の柱掘形をもつ。

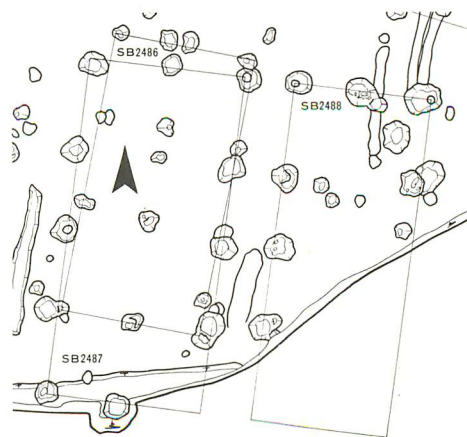


fig. 6 掘立柱建物(1:200)

土壇

S K 2422 調査区北端にある小土壇である。一辺 1.5 m 前後、深さ 10 cm 前後で、S D 2421 と重複する。この時期の土壇はこれが唯一である。

井戸

S E 2460 調査区中央部にあり、S B 2449 の東側に位置する。径 2 m の円形素掘り井戸で、壁面は地山より 1 m 程で、黄褐色土層からこぶし大の石を含む砂礫層に変わり、この部分から下方にかけ著しい壁面の崩落が認められた。そのため、長さ 7 m の鋼矢板を方形に打ち込み完掘することにした。水中ポンプでの排水能力を超えた湧水があり、調査は困難を極めたが、地山より 4.3 m で底に達し、底径は 0.8 m で徐々に細く掘られていることがわかった。底の絶対高は 4.4 m である。出土遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器碗・皿のほか、底近くで出土の斎串の先端部や曲物の破片、昆虫の羽根、種子等がある。井戸の使用年代は、その下限を井戸埋土上層から出土した灰釉陶器碗・皿の編年から黒笹 90 号窯期段階に求められる。

溝

S D 2421・S D 2423・S D 2429 調査区北部にある幅 40 cm、深さ 10 cm の小規模な溝で、それぞれ調査区外へ延びたり、後世の攪乱を受けているため全容は不明である。

S D 2477 調査区中東部にある南東方向に延びる溝。幅 40 cm、深さ 10 cm。

S D 2478 S D 2477 の南側にこれと並走する溝で、東の調査区外へ延びる。



fig. 7 井戸 S E 2460 の近景



fig. 8 調査中の井戸 S E 2460

(4) 平安時代後半の遺構

土壇

S K 2456 調査区南西部にある径1.2m×1.6mの円形小土壇。土師器杯・甕、折戸53号窯期段階の灰釉陶器椀が少量出土している。

S K 2458 調査区南東部にある一辺1.5m×1.3m、深さ21cmの方形小土壇。折戸53号窯期段階の灰釉陶器椀、土師器杯・甕が出土している。

溝

S D 2474 奈良時代末葉～平安時代初頭頃の溝S D 2438や、平安時代末葉の溝S D 2475の東側に沿って並走する南北溝。幅50cm、深さ30cm。

(5) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物

S B 2443 調査区の西部にある東西棟建物。2間×2間の身舎に北・東・西に廂の付く4間×3間の三面廂付き建物である。桁行柱間は2.6m、梁行柱間は2.3mで、廂柱間は、北面が1.6m、東面が2.2m、西面が2.5mを測る。柱掘形は円形で径40cm、深さ45cm前後である。南東隅には2間×1間分、深さ25cmの浅い土壇がある。土壇は柱を避けるように掘られており、掘立柱建物を建てた後に掘られたものと思われ、建物に伴う何らかの機能をもった施設と考えられる。土壇内からは、山茶椀、土師器小皿・甕等、平安時代末葉における日常雑器のセットが出土している。

S B 2446 S B 2443の東側にある3間×2間の東西棟建物。桁行6.3m、梁行4.0mで、柱間はそれぞれ2.1m、2.0mである。柱掘形は径40cm、深さ15cm～40cm。

S B 2448 S B 2447と重複する2間×2間の建物で、中央を現代溝に切られているため、中心の柱を確認できなかったが、倉庫と考えられる総柱建物であろう。S B 2443と建物の方向を揃える。柱掘形は径30cm、深さ25cm。

S B 2453 S B 2443の南にある3間×3間の南面廂付東西棟建物。桁行6.5m、梁行5.5mで、廂柱間1.7mを測る。S B 2453の北側柱列は、S B 2446の南側柱列と柱通りを揃えている。

S B 2457 調査区南西部にある4間×1間の東西棟建物。桁行9.2m、梁行2.2m。

桁行柱間 2.3m である。柱掘形は径40cm、深さ40cm。

S B 2468 調査区南部にある4間×4間の東西棟建物。構造的には、S B 2443と同じく三面廂付建物が基本で、これにさらに北面に1間分廂を延ばした建物と考えられる。桁行柱間2.4m、梁行柱間2.2m。廂は北面2.2m、東面2.4m、西面2.3mを測る。柱掘形は径40cmの円形で、深さ30cm～50cmである。南東隅には2間×1間分の浅い土壇があり、平安時代末葉の土器が多数出土している。S B 2468の西妻柱列は、S B 2457の東妻柱列と柱通りを揃えており、主屋、副屋といった関係が想定される。

S B 2469 S B 2468と重複する東西棟建物。桁行3間分まで確認したが、さらに調査区外へ延びるものと思われる。

S B 2483 調査区南東部にある4間(8.7m) × 3間(6.3m)の三面廂付東西棟建物である。廂柱間は三面とも2.1mで、南東隅にS B 2443、S B 2468と同様、2間×1間分の土壇を設けている。土壇からは、平安時代末葉の土器が少量出土している。

土壇

S K 2411 調査区北端にある土壇。調査区外へ延びて全体の規模は不明。

S K 2444 S B 2443に伴う5m×2m、深さ25cmの楕円形土壇である。土壇内より土師器皿・小皿・甕、山茶碗が出土。

S K 2451 調査区中央部にある2.2m×0.7m、深さ20cmの溝状土壇。

S K 2467 調査区南部にある径60cm、深さ10cmの小土壇である。土壇内より完形の

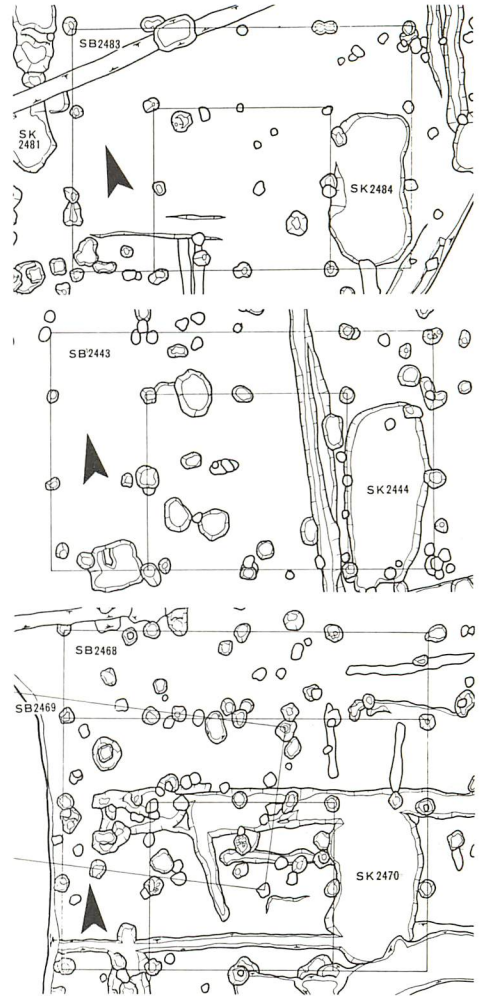


fig. 9 三面廂付掘立柱建物(1 : 200)

土師器皿・小皿が多量に出土したほか、土師器甕、山茶椀が少量出土した。

S K 2470 S B 2468の南東隅に設けられた4.4m×2.2m、深さ25cmの土壇である。

S K 2444と同様平安時代末葉の土器が多量に出土している。

S K 2473 調査区南部にある2m×1mの小土壇。S D 2474の埋土を切っている。

S K 2480 調査区南東部にある径1.2m前後の不整形土壇である。土壇内より土師器皿・小皿、灰釉陶器小瓶、山茶椀、山茶椀質の皿、瓦器小皿等が出土している。

S K 2481 S K 2480の南にある径1.8m、深さ20cmの不整形土壇である。平安時代末葉の土器が少量出土した。

S K 2482 S K 2480の北東にある径2.7m×1.5m、深さ15cmの不整形土壇。土壇内より平安時代末葉～鎌倉時代初頭頃の土器が出土している。

S K 2484 S B 2483の南東隅に設けられた径3.8m×2.0m、深さ15cmの土壇。土壇の南半分は、白色粘土が埋まり、固くなる。出土遺物の量は少ない。

S K 2485 調査区南東隅にある不整形土壇。調査区外へ延びて全体の規模は不明。

溝

S D 2475 S D 2438を切る南北方向の溝。溝幅2.6m、深さ0.8m～1.2mで、溝底部のレベルは北から南に向かって緩やかに下降する。溝の北端は、S D 2435やS D 2476に切られる。

(6) 鎌倉時代の遺構

井戸

S E 2414 調査区北西部にある径1.4mの素掘り井戸。南半の掘形を溝S D 2415に切られる。

S E 2442 調査区西端にある径1.8mの円形素掘り井戸。掘形内埋土上層より鎌倉時代の土器が少量出土した。

S E 2452 調査区中央部やや西寄りにある径2.2mの円形素掘り井戸。壁面の崩落が著しいため、鋼矢板を打って完掘し、遺構面より5.0m、絶対高3.9mで底に達した。井戸埋土内より山茶椀66個体をはじめ、少量の土師器皿、青磁椀、曲物、竹片等が出土しており、井戸の埋没時期を鎌倉時代初頭頃に求められる。

溝

S D 2415 調査区北部を東西に走る溝。幅 2.0m、深さ40cm前後で、調査区北東部の南北溝S D 2425と交わる。S D 2416とほとんど重複しているが埋土の切り合いからS D 2415が新しい。溝底部は平坦である。

S D 2416 S D 2415に大半が切られているため、底部のみ残る。溝底のレベルはS D 2415より20cmほど低い。

S D 2417 調査区北西部でS D 2415の南にある溝。南肩をS D 5に切られているため溝幅は不明。深さ40cm前後で、底部で2条の溝に分かれる。

S D 2418 S D 2415の南を並走する東西溝。幅 2.0m、深さ40cm前後で底部は平坦である。調査区東部でS D 2435に合流する。

S D 2420 S D 2415の北側にある幅40cm、深さ10cmの東西溝で、大半が後世の攪乱を受けている。調査区東部のS D 2433につながる可能性がある。

S D 2424 調査区東部の南北溝。幅0.8m、深さ30cm。

S D 2425 S D 2424の東にある南北溝。幅 1.3m、深さ40cmで、道跡S F 2427の西側溝にあたるものと考えられる。

S D 2426 S D 2425の東側を並走する南北溝。道跡S F 2427の東側溝に相当するものと思われる。幅 1.2m、深さ40cm。ほぼ同じ位置にあるS D 2428の埋土を切っており、この溝の掘り直しと考えられる。

S D 2428 S D 2426に大部分が切られるL字形に曲る溝。幅1.2m、深さ50cm。

S D 2430 S D 2426の東側を並走する南北溝で、S D 2426と同様にL字形に曲がり、南東方向に延びるものと思われる。

S D 2433 S D 2430の南端で交わる南東方向に延びる溝。幅1.0m、深さ20cm。

S D 2434 S D 2426が南東方向へ折れ曲がる地点に接する長さ5.4m、幅0.8m、深さ30cmの小溝である。S D 2418と重複するがその前後関係は不明。

S D 2435 S D 2418から枝分かれして南東方向に延びる溝。幅 1.6m、深さ70cm。道跡S F 2427の南側溝と考えられる。

S D 2436 S D 2434の西側にある長さ5.2m、幅1.3mの小溝。

S D 2455 調査区西部を南北に真直ぐ延びる溝で、幅0.5m、深さ15cmを測る。

S D 2472 調査区南部を東西に走る幅1.0m、深さ10cmの浅い溝。

S D 2476 調査区東部をS D 2474やS D 2475に並走する南北溝。幅0.6m、深さ20cmであるが、北端で西へ曲がり幅1.4mの溝となり、さらにすぐ北へ折れて、S D 2435と共にS D 2418の分流を形成しているものと思われる。

道路

S F 2419 S D 2415・S D 2418を側溝とする東西方向の道路遺構。心々距離約4.0mを測る。

S F 2427 S D 2425及びS D 2435・S D 2426を側溝とするL字形に曲がる南北及び東西方向の道路遺構。西側でS F 2419と連結するものと思われる。道路面は周囲の遺構面より10cm～20cmほど低く、随所にこぶし大の石敷箇所や細砂が認められた。また道路面下には、暗渠的な排水施設であろうか。側溝に直交するように深さ10cm前後の小溝が何条も掘られていた。

(7) 鎌倉時代以降の遺構

S D 5 道路遺構S F 2419廃絶後掘られた東西溝。幅1.2m、深さ0.9m～1.4mで、溝底のレベルは西方が東方に比べ30cm程低い。一部掘り直しされている箇所が認められ、溝セクションより北側の溝が古く、断面V字形に掘られていて深い。時期的には鎌倉時代に掘られた溝と考えられるが、出土土器の中には、量的に少ないが室町時代の天目茶椀や土師器鍋、さらにそれ以降の陶磁器類もあり、かなり長期にわたって完全に埋まりきらずに存続していたものと思われる。おそらくこのS D 5は、古里地区から始まり、宮域北部を東西に走る大溝に続くものであろう。

(8) 時期不明の遺構

掘立柱建物

S B 2432 調査区北東部にある3間×2間の南北棟建物。柱掘形から遺物が全く出土しなかったため時期不明であるが、鎌倉時代の溝に柱掘形が切られているため、これよりは古い建物である。

参考文献 『三重県齋宮跡調査事務所年報1981』三重県齋宮跡調査事務所 1982。

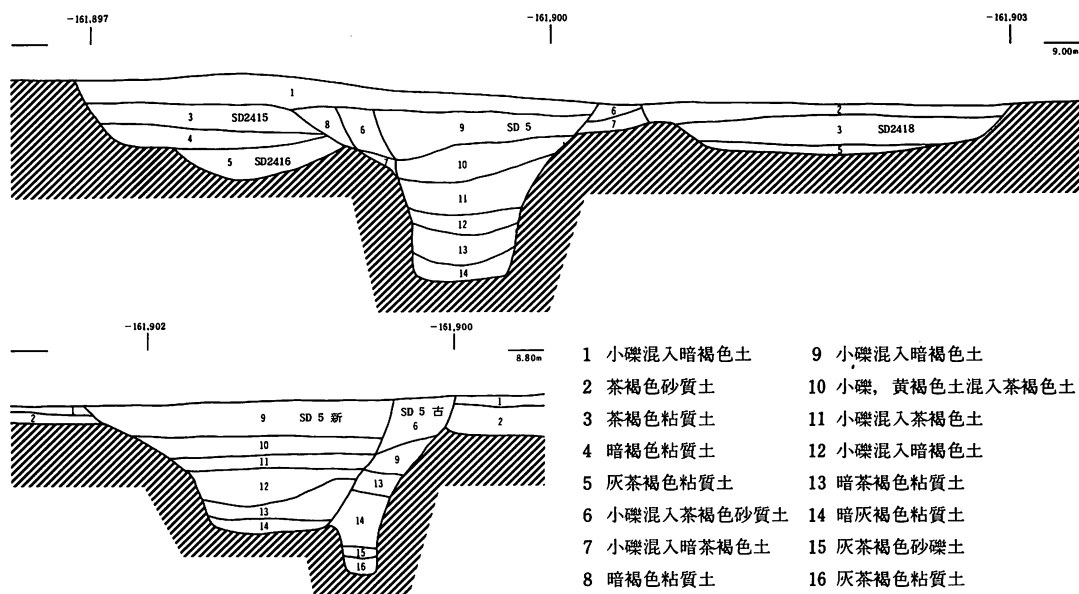


fig. 10 溝，道路土層断面図（1：50）

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(m)	柱 穴	カマド	時 期	備 考	
1441	3.6×3.6	NO°	20		東 壁	奈 良		
S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
2447	4×2	E4°S	6.3	4.1	1.58	2.05	奈良末～平安初	
2431	(2)×2	E9°N	—	4:5	2.25	2.25	平安中	
2445	5×2	E9°S	11.7	4.4	2.45	2.2	〃	東の桁行1間分のみ1.8m
2449	3×2	E8°S	6.7	4.2	2.23	2.1	〃	
2454	3×2	N2°W	6.4	4.3	2.13	2.15	〃	
2471	—×2	N6°W	—	4.0	—	2.0	〃	
2479	4×2	E12°S	9.3	3.7	2.25	1.85	〃	東面廂，廂柱間2.6m
2486	3×2	N11°E	7.5	3.7	2.5	1.85	〃	
2487	4×2	N8°E	9.0	4.1	2.25	2.05	〃	S B 2486より新しい
2488	(4)×2	N8°E	—	3.6	2.2	1.8	〃	
2443	4×3	E10°S	9.9	6.2	2.6	2.3	平安末	三面廂，廂柱間北面1.6m，東面2.2m，西面2.5m，南東隅に土城
2446	3×2	E12°S	6.3	4.0	2.1	2.0	〃	
2448	2×2	E10°S	3.9	3.7	1.95	1.85	〃	
2453	3×3	E12°S	6.5	5.5	2.17	1.83	〃	南面廂，廂柱間1.7m
2457	4×1	E5°S	9.2	2.2	2.3	2.2	〃	
2468	4×4	E5°S	9.4	8.9	2.4	2.2	〃	三面廂，廂柱間北面2.2m，東面2.4m，西面2.3m，南東隅に土城
2469	(3)×2	E11°S	—	4.3	2.2	2.15	〃	
2483	4×3	E17°S	8.7	6.3	2.3	2.1	〃	三面廂，廂柱間2.1m，南東隅に土城
2432	3×2	N1°W	6.8	4.5	2.27	2.25	時期不明	

tab. 1 竪穴住居，掘立柱建物規模表

III 遺 物

(1) 主要遺構出土遺物

平安時代末葉から鎌倉時代にかけての遺構が多いこともあって、出土遺物ではこの時期の土師器・山茶椀が大半を占める。ほかに奈良時代後半から平安時代初頭にかけての竪穴住居 S B 2441 や土壇 S K 2450 から出土の土器、平安時代中葉の井戸 S E 2460 出土の土器、平安時代後半の溝 S D 2474 や土壇 S K 2456・S K 2458 出土の土器が少量ある。これらの中で土壇 S K 2450 出土のへら描き土器「水司鴨□」は齋宮の発掘史上、特に注目される発見となった。

土器以外では、井戸 S E 2452・S E 2460 出土の曲物や木の実、S E 2460 出土の齋串の先端部がある。以下、各遺構の出土土器を中心に説明する。

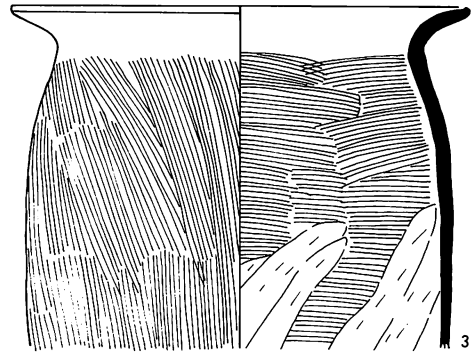
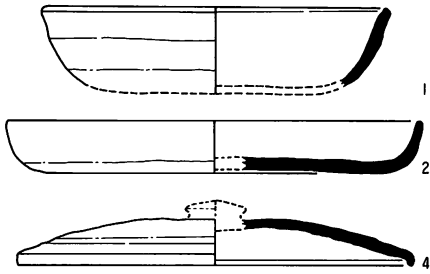
S B 2441 出土土器 (fig. 11, 1～4)

竪穴住居埋土から出土したもので、土師器杯・皿・甕、須恵器杯・杯蓋がある。実測可能なものは 4 点のみで、土師器は器面の保存が悪く、杯・皿の暗文の有無も不明である。皿(2)は平坦な底部に内弯気味に立ち上がる口縁部がつくもので、口縁端部は肥厚せず、丸くおさまる。底部をへらケズリし、口縁部を横なでする b 手法。長甕(3)は、体部内外面をハケ目調整し、体部内面下半を下から上方へへらケズリする。須恵器杯蓋(4)は、天井部をへらケズリし、内面中央部を乱方向になでる。ロクロ右回転。いずれも奈良時代後半の土器と考えられる。

S K 2450 出土土器 (fig. 11, 5～7)

土壇 SK 2450 は径 5.2m × 2.8m、深さ 15cm で、浅いが大きな土壇である。しかし出土土器は奈良時代末葉～平安時代初頭の土師器杯・皿・甕・甑、須恵器杯・蓋などの細片が少量出土したにとどまる。これらに伴ってへら描き土器が 4 点出土している。1 点は、厚手の土師器杯あるいは皿の底部に「水司鴨□」と焼成前にへら描きされたもの(7)で、「鴨」の下の一字が欠損していて不明。ここでは一部残存する底部から口縁部にかけての立ち上がり部分から推定して、口径 14.5cm、高さ 3.5cm の杯と考えた。器面の調整は底部外面をていねいにへらケズリし、内面はていね

SB 2441



SK 2450

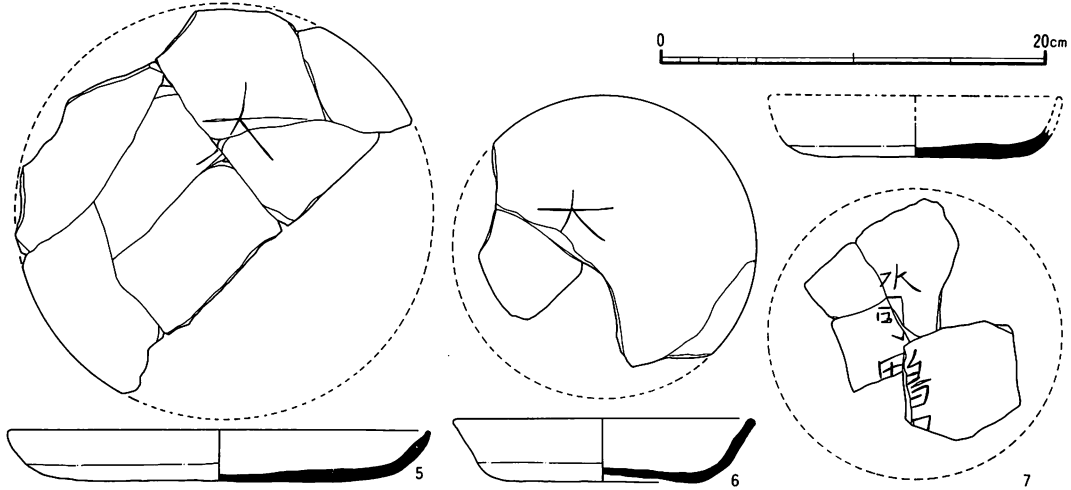


fig. 11 S B 2441, S K 2450出土土器実測図

いになでて器面を平滑に仕上げている。他の3点は、いずれも「大」とへラ描きされたもので、杯(6)や皿(5)の底部内面に描いている。筆跡からおそらく同一人物が描いたものと思われる。器面の調整には、口縁部を横なでする e 手法と、口縁部を横なでし、底部をへラケズリする b 手法がある。

S E 2460出土土器 (fig. 12, 8~23)

井戸埋土である黒灰色粘質土層から出土した一括土器で、土師器杯・皿・椀・甕、須恵器鉢、灰釉陶器椀・皿がある。

土師器杯(8~11)は口径14cm前後で、口縁部が強く横なでされ、大きく外反する。底部はなでつけられ、器面がでこぼこする。底部に指紋をよくとどめるもの(9)もある。器壁は全体に3mm前後と薄く仕上げられる。淡褐色ないし橙褐色を呈する。杯(12)は赤褐色を呈し、器壁も厚く、杯(8~11)に比べ、やや古手の感がある。皿(15)、椀(14)も同様と思われる。杯(13)は口径17cmの大型品で、口縁端部

を横なでし、底部はへラケズりする。甕は口径17cm前後のもの(16・17)と、口径22cmを越え、やや胴長となるもの(18)がある。16、17は球形の体部にくの字形に曲がる口縁部がつき、端部は内側に巻かれやや肥厚する。体部外面は縦方向に幅の広いハケメを施し、下半は横方向にへラケズりする。体部内面は横方向に細かいハケメを施し、底部はへラケズりする。

須恵器鉢(19)は、底部と口縁部の少片から復元実測したものである。ロクロ水挽き成形後、体部外面下半から底部をへラケズりする。

灰釉陶器皿(21・22)は灰釉をハケ塗りし、底部をへラケズりするもので、猿投窯編年の黒笹90号窯期に相当する特徴をもっている。21は口縁内外面ハケ塗りで、^(註1)内面に重ね焼き痕が認められ、低い角高台が付く。22は内面全面に粗いハケ塗りがされる。口縁端部は、やや内側へ折れ、高台は内弯する三日月高台である。椀(20)は無釉のもので、器壁は薄い。

23は井戸最下層より出土の斎串先端部である。

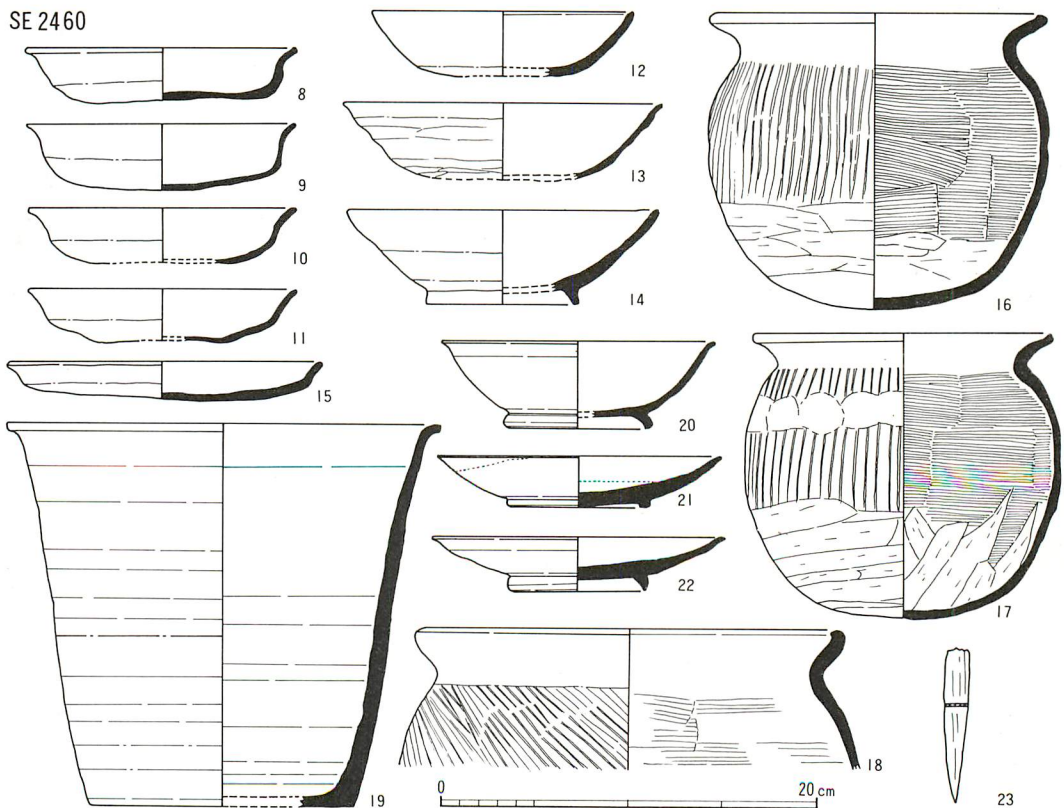


fig. 12 S E 2460出土土器，斎串実測図

S D 2474出土土器 (fig. 13, 24~30)

土師器杯・台付皿・甕、灰釉陶器碗が少量出土している。

土師器杯(24~26)は、口径12cm~13cmで、S E 2460出土の杯に比べ、口径及び口縁部の横なでの範囲が減少傾向にある。台付皿(27)は器面の保存が悪いため調整が不明であるが、ロクロを使用していないものと思われる。甕(28・29)は、S E 2460出土の甕に比べ、口縁部の長さが短くなり、口縁端部の内巻きが明瞭となる。体部外面はハケメ調整するが、体部下半から底部にかけては器面の保存悪く不明。

30は灰釉陶器碗の底部片。ツケ掛けと思われる。折戸53号窯期ないしは次の段階の東山72号窯期に相当するものと思われる。

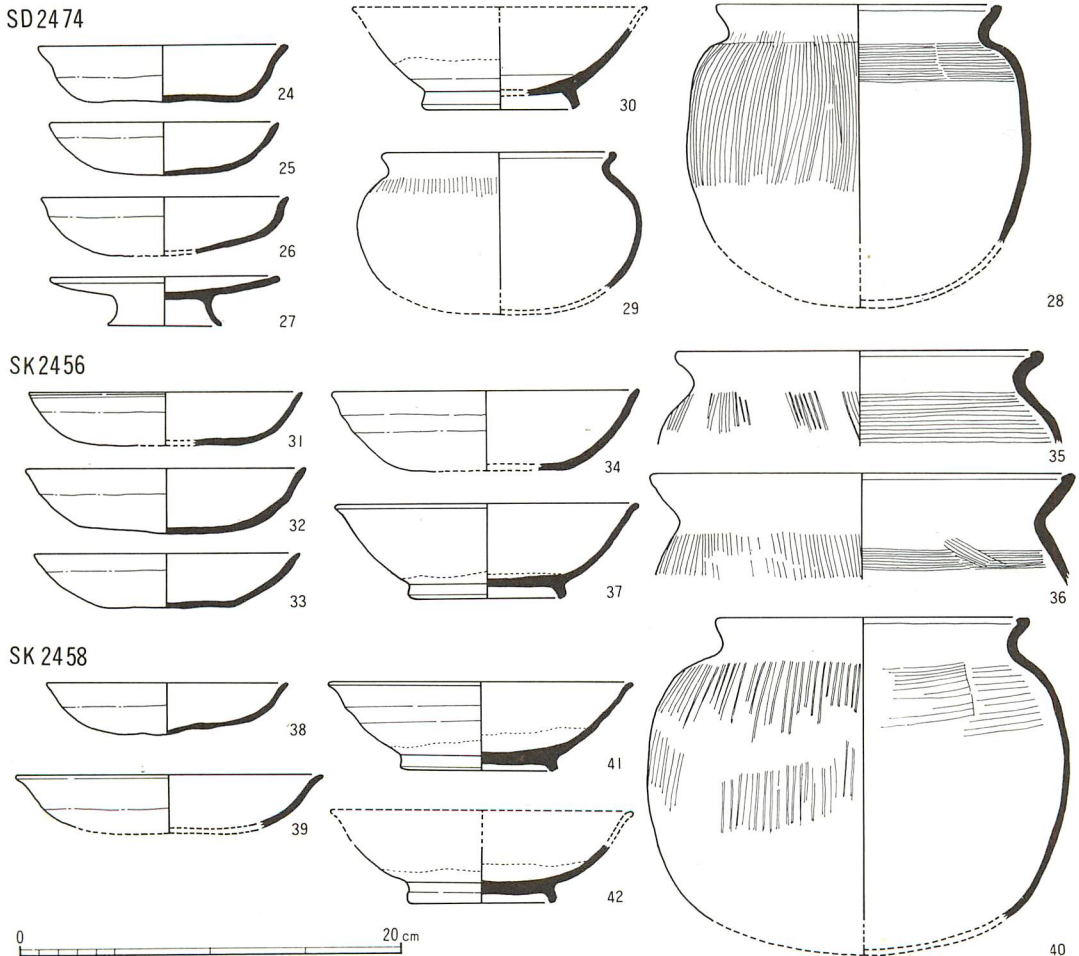


fig. 13 S D 2474, S K 2456, S K 2458出土土器実測図

S K 2456出土土器 (fig. 13, 31~37)

土師器杯・甕、灰釉陶器椀が少量出土している。

土師器杯(31~33)は口径14.0cm~14.6cm、深さ3.0cm前後で、形態的には皿に近くなる。杯(34)は口径16cmの大形品で口縁部は2段に横なでされる。S E 2460出土の杯(13)に続くものであろう。甕は肩が張り短かい口縁のつく(35)と、肩が張らずに、外傾の少ない長めの口縁がつくもの(36)がある。甕(35)の体部外面の調整は、間隔を置いてハケメを施す。

灰釉陶器椀(37)は、灰釉の剥離が著しいため、ツケ掛けかハケ塗りかは不明であるが、底部はへラケズりする。折戸53号窯期に相当するものと思われる。

S K 2458出土土器 (fig. 13, 38~42)

S D 2474やS K 2456と同様な土器が少量出土している。甕(40)のハケメは粗く、灰釉陶器椀(41・42)は、底部が糸切りのままで低い高台がつく。41はハケ塗り。

S K 2480出土土器 (fig. 14, 43~58)

土師器皿・小皿、ロクロ製土師器小皿・台付皿、山茶椀、山皿、灰釉陶器小瓶、須恵器甕、瓦器皿、白磁椀がある。

土師器皿(43)は、口径13.2cm、器高2.7cm。口縁部が内弯気味に立ち上がる。皿(44)は、口径15cm、器高3.5cm。椀に近いタイプで、口縁端部は上方に曲げられる。小皿は口径9cm前後でロクロ製(47・48)と非ロクロ製(45・46)がある。ロクロ製小皿(47・48)は底部に糸切り痕を残しており、通称糸切り土師器と呼んでいる一群である。台付皿(49)は口径17.5cm。ロクロ水挽き痕が明瞭に残り、胎土良好。

山茶椀(50)は、5ヶ所に輪花をもつもので、濃緑色の釉がツケ掛けされる。山皿(51~54)は口径11.4cm~12cm、器高2.5cm~3.3cmでロクロ水挽き痕がよく残る。細砂を含むが胎土良好。

口縁部を欠く小瓶(55)は、体部及び底部外面に淡緑色の灰釉がハケ塗りされ、体部下半は横方向にへラケズリされる。

瓦器皿(57)は口径9.8cm、口縁部内面は細かくへラミガキされ、底部内面は、

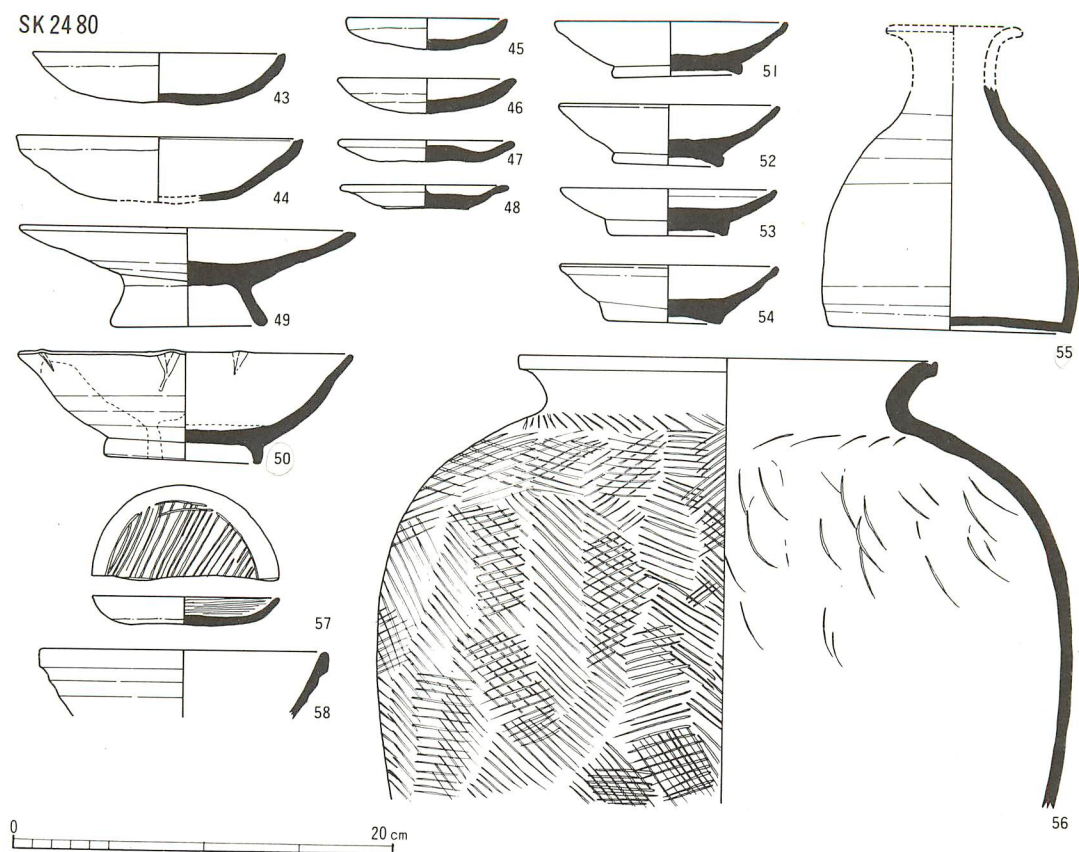


fig. 14 S K 2480出土土器実測図

これより粗くヘラミガキされる。58は口縁部がわずかに残る白磁椀片である。

S K 2470出土土器 (fig. 15, 59~73)

S B 2468の南東隅に設けられた土壇。大小各種の土師器皿・甕、灰釉陶器壺、山茶碗、山皿等が出土している。

土師器皿にはロクロ製(64~66)と非ロクロ製(59~63)がある。ロクロ製皿では、底部直下で糸切りするもの(64)、高台を意図して底部を厚めに糸切りするもの(65)、さらに断面三角形の高台をつけるもの(66)がある。小皿(60・61)は、口径8.4cmの小形品で手づくね成形される。器壁は8mm前後と厚手で、胎土に砂粒を多く含む。小皿(62・63)は口径10cm前後。胎土に砂粒を多く含むが、器壁は小皿(60・61)に比べやや薄く、仕上げも若干ていねいである。甕はふつう口縁端部が内側へ巻き込み肥厚するが、巻き込まれないもの(68)もある。器面の調整は、この時期から体部外面の縦方向のハケメが消失し、横方向のハケメがわずかに残ったり、横方向の

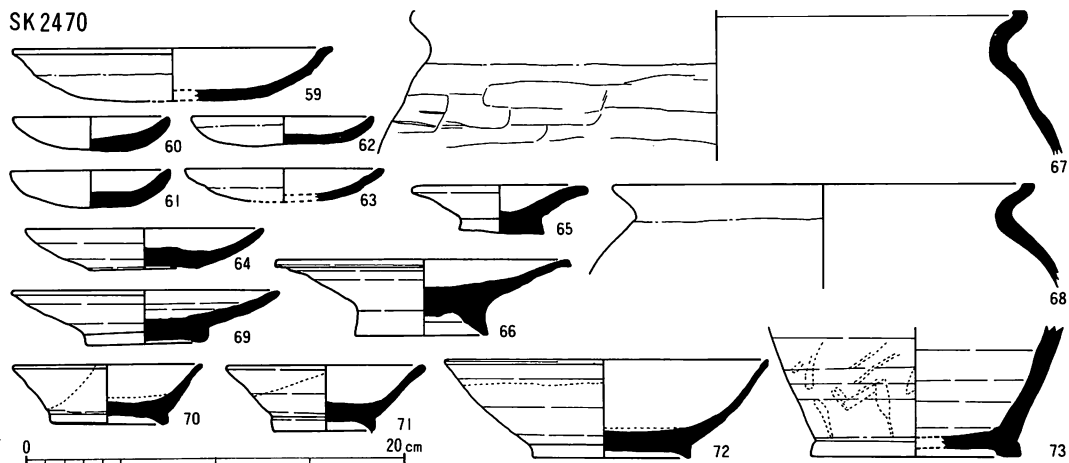


fig. 15 S K 2470出土土器実測図

ヘラケズリやなでのみになる。

山茶椀や山皿は淡緑色の自然釉が口縁の約半周ほどにかかる。皿(69)は器形としては灰釉陶器皿の系譜を引くものと考えられるが、胎土は山茶椀質である。

S K 2444出土土器 (fig. 16, 74~87)

S B 2443の南東隅に設けられた土坑。S K 2470出土土器と同様、大小の土師器の皿(74~78・80~83)とロクロ製土師器皿(79・84)、甕(85・86)、灰釉のかかる山茶椀(87)がある。土師器皿には、口縁部が、内弯気味に緩やかに立ち上がるもの(74, 75)と口縁部を上方に折り曲げるように強く横なでし、口縁部外側に面を作るもの(76~78)がある。いずれも口径13.6cm~15.0cmで、口縁端部を0.8cm~1.2cmほど横なです。胎土は、砂粒を多く含み、色調は淡褐色や茶色味を帯びた白色を呈する。

S K 2467出土土器 (fig. 16, 88~102)

S K 2467は径60cm足らずの小土坑であるが、完形に近い土師器皿類が多量に出土したほか、土師器甕、山茶椀が少量出土している。土師器皿(88~92)は径14cm前後で、器高3.2cm~3.6cm。皿(93)は器高が2.4cmと低い。このタイプは量的に少ない。98~100の土師器小皿はロクロ製で、底部に糸切り痕をよくとどめ、他の皿類に比べ胎土良好である。甕(101)の体部外面には、原体不明の横方向の粗いケズリが見られる。S K 2467出土土器は全体的にS K 2444の土器組成と似ており、ほぼ同時期と考えられる。

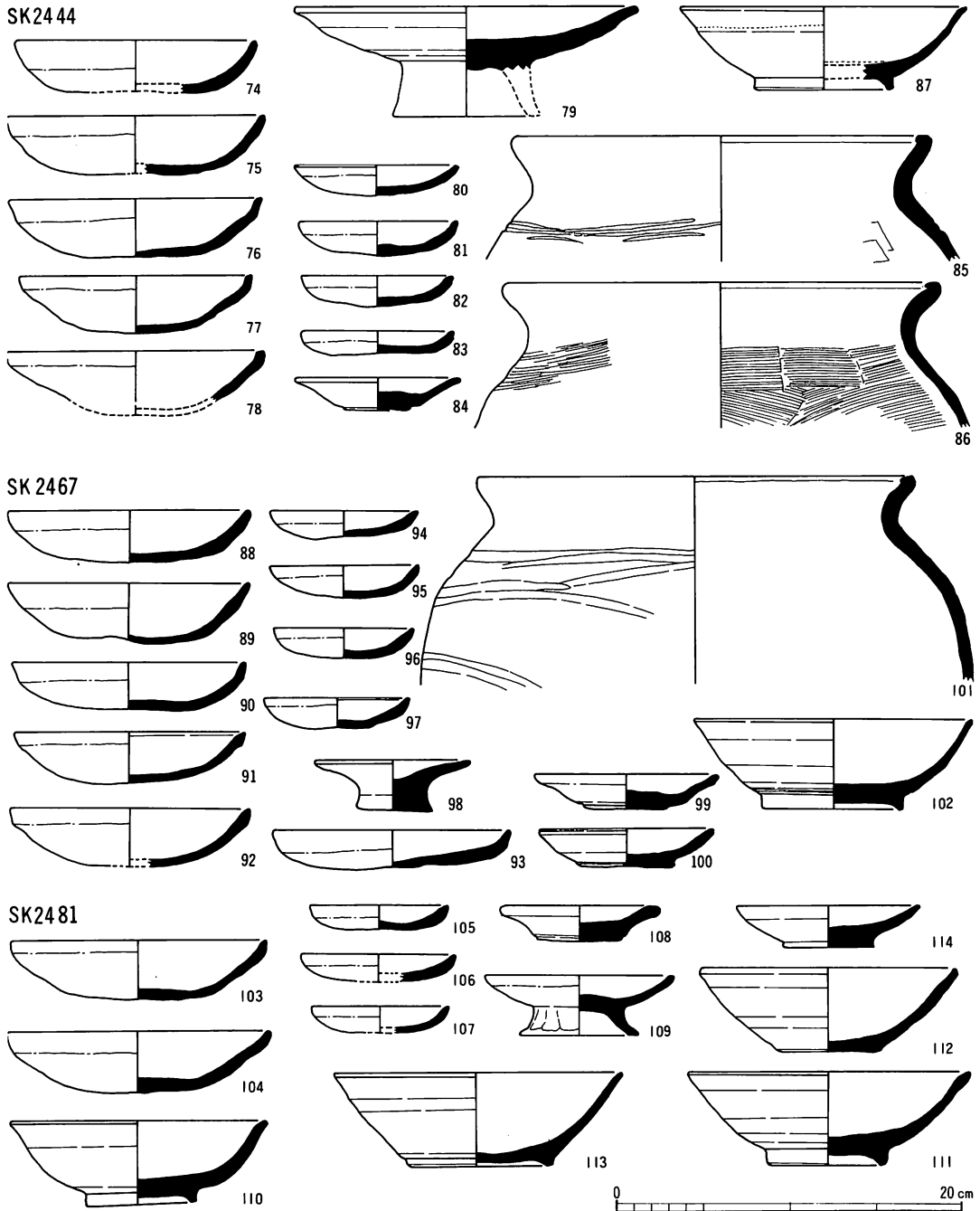


fig. 16 S K 2444, S K 2467, S K 2481出土土器実測図

S K 2481出土土器 (fig. 16, 103~114)

大小の土師器皿、山茶碗等が少量出土している。土師器皿 (103・104) は、S K 2467出土の土師器皿に比べ、形態的には同じであるが口径が1 cmほど大きい。台付

小皿(109)は口径11cm。非ロクロ製で、皿底部内面に布目圧痕が付く。

山茶椀は、腰部が張り内弯気味に立ちあがるもの(110)と体部が直線的に開くもの(111~113)がある。110・111・112はいずれも胎土良好であるが、焼成があまい。112には高台が付かず糸切りのままである。山皿(114)は口径10.6cmで、底部は厚目に糸切りされて擬高台となる。

S E 2460出土土器



S K 2480出土土器



S D 2475出土土器



fig. 17 各遺構出土土器

S D 2475出土土器 (fig. 18, 115~145)

S D 2475は埋土が上層、下層、最下層に分かれるが、それぞれの層から出土した土器を見ると、お互いに接合関係のあるものや、下層出土の土器の方が新しい場合もあり、ここでは層位を考えずに一括して述べることにする。出土土器には、S K 2444、S K 2467出土土器と同様の土師器皿・台付皿・椀・甕、山茶椀、山皿、須恵器鉢などがある。

土師器皿にはロクロ製(121~126)と非ロクロ製(115~120)がある。ロクロ製皿は胎土に砂粒を多く含み、器面がザラザラしているが、比較的良く精製されている。非ロクロ製皿は口径14cm~15cmのものと、口径9cm前後の小皿がある。同様にロクロ製皿も、口径15cm前後のものと、口径10cm前後の大小の皿があり、さらにこれに高台を付けた台付皿も大小のものがある。土師器椀(127・128)は、いずれもロクロ製で底部に糸切り痕をとどめる。体部は腰が張り内弯気味に立ち上がる。128は口径16.6cm、器高5.7cmで、高台の径は山茶椀に比べて一回り小さい。土師器甕は、口縁端部を内側に巻き込み肥厚するもの(130)と巻き込まないもの(129)がある。いずれも胎土に砂粒多く、器面がザラザラしている。

山茶椀は、高台が三角形のもの(131)、逆台形状のもの(132~136)、低くて丸味のある粗雑なもの(137~139)がある。これらのうち131は最も古いタイプで、口縁端部に白っぽい灰釉がツケ掛けされ、5ヶ所に指でつまんだ輪花がある。山皿には椀に近いタイプ(141)と皿に近いタイプ(140・142・143)があり、このうち140や141が、山茶椀(131)に共伴するものであろう。

須恵器鉢は口縁部のみであるが、口縁端部が面をなすもの(145)と丸くおさまるもの(144)がある。145は口径32cm。144は口径34cm、体部に火襻痕がある。

S E 2452出土土器 (fig. 20, 152~165)

山茶椀66個体をはじめ、少量の土師器皿(152~155)・台付皿(156)・甕(157)、須恵器甕(162)、青磁椀(163)、曲物(164・165)、竹片等が出土している。

161は、茶褐色を呈し、底部は糸切りのまま。陶器椀の底部片と思われる。なお細片のため図示し得なかったが土師器甕のうち、口縁端部が内側に巻かれて肥厚する

が、S K2482出土の150や151の甕のように端部が丸くならず、内側が強く横なでされて内傾する幅広い平坦面をなすものがある。

曲物(164)は井戸の最下層で出土。約半分が残存するが、曲物の接合部は、細片のため復元実測はできない。推定口径24cm、高さ11.3cmを測る。内側は鋭利な刃物による細かい刻みが縦及び斜めに施される。

SD2475

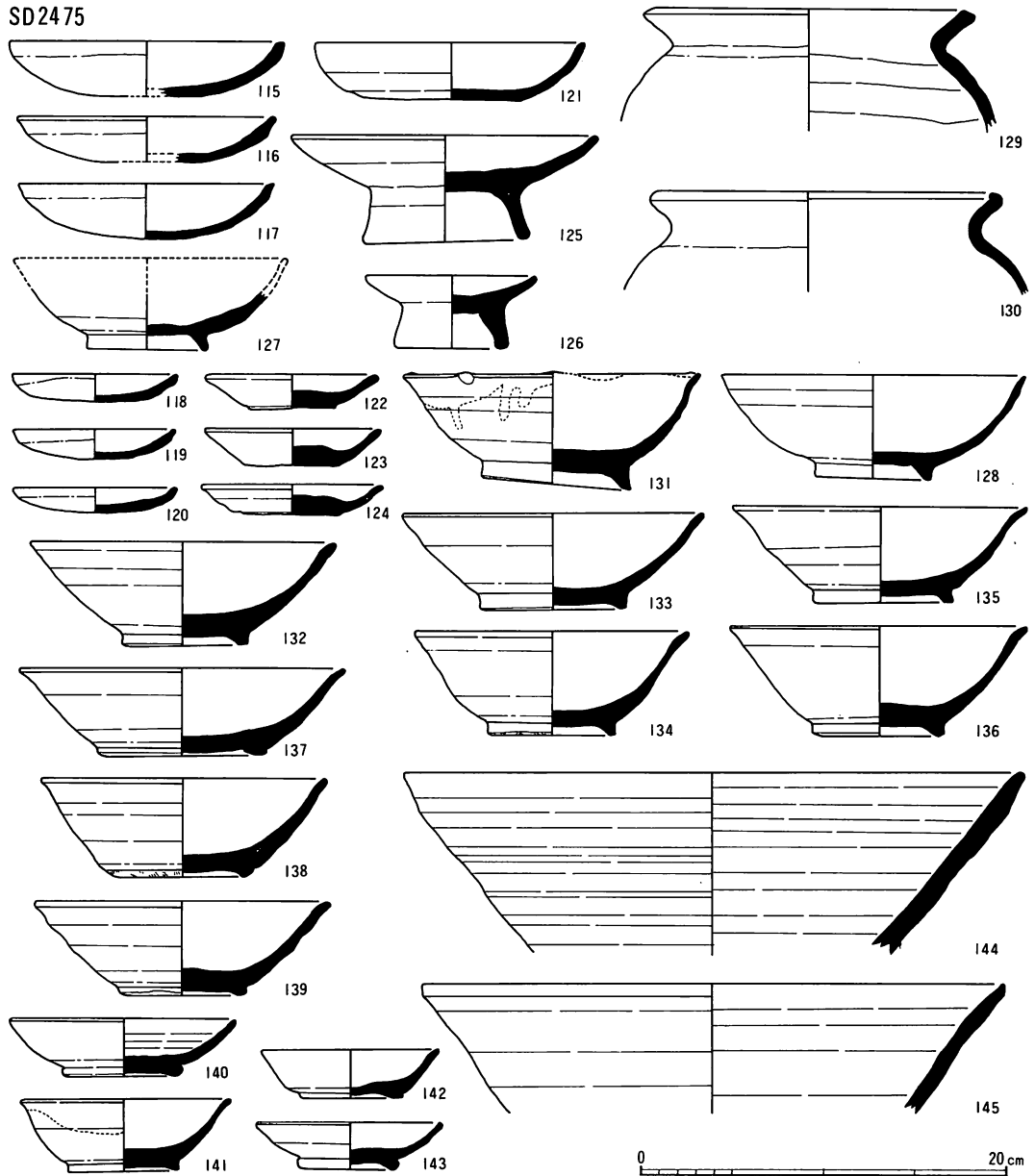


fig. 18 S D2475出土土器実測図

S K 2482出土土器 (fig. 19, 146~151)

土師器皿・台付皿・甕が少量出土している。土師器皿(148)は口径10.5cm、茶味白色を呈し、口縁端部は内側に巻き込まれ肥厚する。斎宮ではほとんど例を見ないタイプである。台付皿(149)は、非ロクロ製で、皿部と高台との付け根を内外面とも円周に沿って楯状工具による櫛目がみられる。甕(150・151)は口径20cm前後で、胎土に砂粒を多く含み、外面にススが付着する。

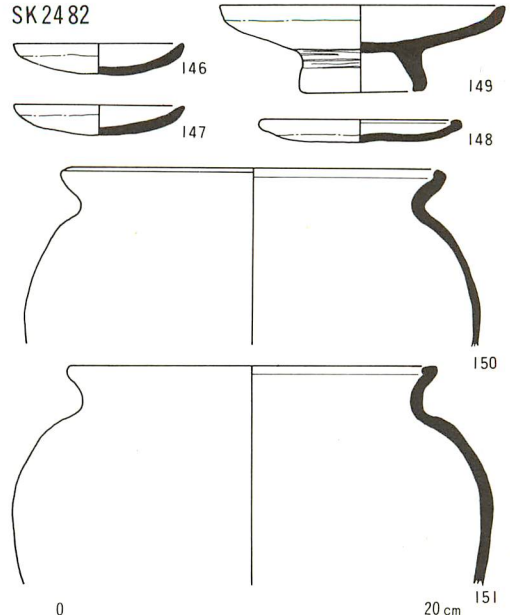


fig. 19 S K 2482出土土器実測図

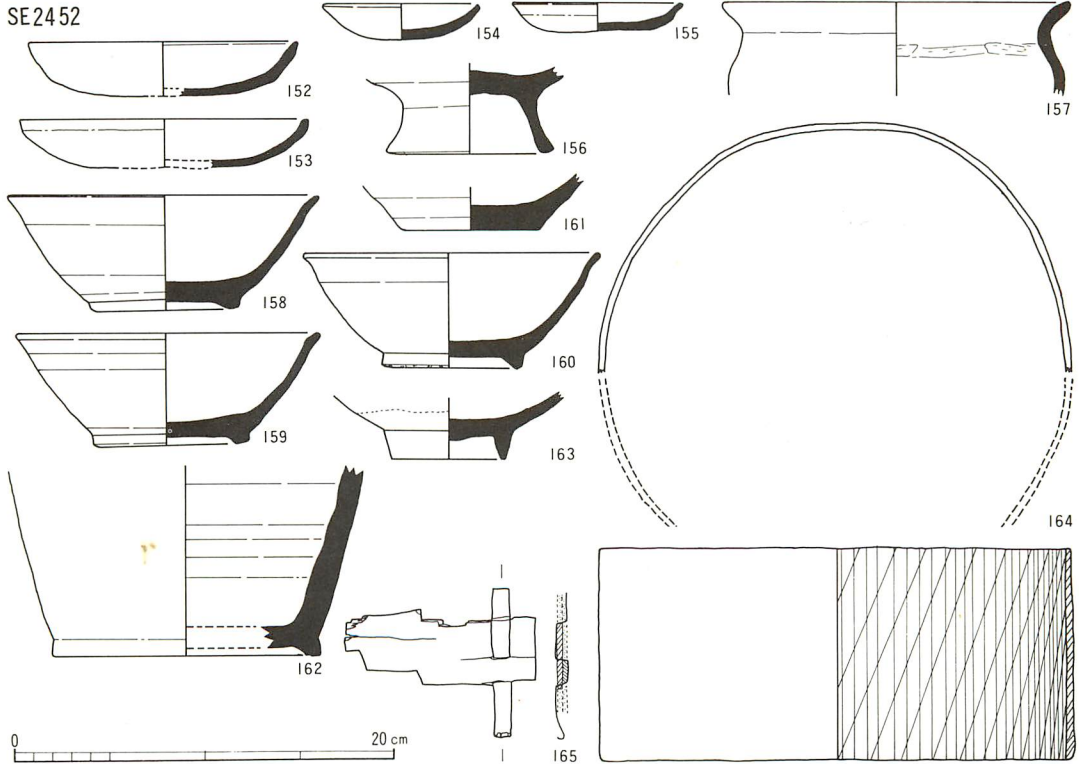


fig. 20 S E 2452出土土器, 曲物実測図

(2) 平安時代末葉における土師器の様相

これまでに齋宮における平安時代後半から末葉にかけての土器編年は、S E 2000^(註2) (東山72号窯期相当)→S K 1074・S K 1730^(註3) (百代寺窯期相当)としてとらえてきた。しかしこれに続く段階の土器のセット関係、特に山茶碗と土師器との関係やその年代観については不明瞭なままであった。幸い近年、藤澤良祐氏らにより瀬戸山茶碗窯を中心とした型式学的編年研究が進められる一方、猿投窯の編年についても検討^(註5)が加えられ、灰釉陶器から山茶碗への移行期の様相や、その後の山茶碗の年代観^(註6)について次第に明らかになりつつある。そこで、これらの成果をもとに、今回の調査で山茶碗を共伴する一括土器についておよその年代を与え、さらに平安時代後半から末葉にかけての土師器の様相について若干まとめておくことにする。

山茶碗を共伴する良好な一括資料は、今まで述べてきたように、S K 2480・S K 2470・S K 2444・S K 2467・S K 2481などの各遺構出土土器がある。このうちS K 2480出土の山茶碗は、口縁部に灰釉をツケ掛けし、5ヶ所に輪花を配するもので山茶碗の中でも古い要素をもっているが、他の山茶碗については、概ね瀬戸窯山茶碗編年^(註7)(藤澤作成)のII段階第4型式～第5型式に相当するものと思われる。なお山皿^(註7)では、山茶碗をそのまま小さくしたタイプのもののほか、口縁部が直線的に外側へ大きく開き、高台は低くて幅が広く、碗と皿の中間的な瀬戸窯山皿には見られないタイプの山皿も共伴する。一方S K 2480から出土の瓦器皿は、橋本久和氏による高槻市における瓦器編年の第II段階に相当するものと思われ、山茶碗の年代観と相応^(註8)するところから、以上の各遺構出土の土器を平安時代末期、12世紀代の土器の一群として位置付けておきたい。

次にこの時期の土師器について見てみることにする。12世紀代の土師器には、非ロクロ製の皿・小皿、ロクロ製の皿・小皿・台付皿・台付小皿・碗、及び比較的厚手で、口縁端部が内側に丸く肥厚し、基本的には器面をハケメ調整しない甕がある。ロクロ製、非ロクロ製皿は、ともに大小があり、大きいものは口径14cm～15cm、小皿は9cm～10cmに統一されており、12世紀代を通じ法量、胎土、調整法においてさほど大きな変化は認められない。

ところでロクロ製皿は、齋宮跡第49次調査で検出の墓塚S X 2990から出土の土師器皿には、伴わないと考えているので、この土師器に共伴する山茶碗が藤澤編年のⅢ段階第6型式であるところから13世紀前半には完全に姿を消しているようであり、12世紀末をロクロ製土師器の下限としてとらえておきたい。

一方ロクロ製土師器の上限は目下齋宮では、S E 2000出土土器の中に求められる。S E 2000出土土器は猿投窯編年の東山72号窯期に相当するものと考えており、ここでは、ロクロ製土師器は、底部が糸切りのままの碗・小皿・台付皿があるが、量的に非常に少なく、以後の時期のものに比べて胎土が良好である。そして次の百代寺窯期に相当するものと考えているS K 1074やS K 1730の段階でロクロ製土師器の中でも小皿の占める割合が増加し始める。またこの段階では擬高台風底部の厚い小皿も多い。しかしこのタイプの小皿は、12世紀に入り、ロクロ製小皿の大量消費に伴う製作上の技術的な簡略化のためか、あるいは粘土不足への対応のためであろうか、ほとんどみられなくなり、ロクロ製土師器小皿の糸切りの位置が底部直下となるタイプのものが主流となり、12世紀中頃ピークを迎えて以後徐々に減じていくものと考えている。

このように11世紀～12世紀のきわめて限られた時期に登場し消えていくロクロ製土師器は、一体いかなる生産者集団の手によるものか、今後胎土や調整法を詳細に検討し明らかにしてゆきたいと考えている。

註1. 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(I)～(Ⅲ)』愛知県教育委員会1980, 1981, 1983

註2. 「第31-4次調査」『三重県齋宮跡調査事務所年報1980』三重県齋宮跡調査事務所1981

註3. 「第20次調査」『齋宮跡発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会1979

註4. 前掲註2「第32次調査」

註5. 藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ, Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館1983

註6. 前川要「猿投窯における灰釉陶器生産末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅲ』1984

註7. 前掲註5

註8. 橋本久和『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会1980

註9. 「第49次調査」『三重県齋宮跡調査事務所年報1983』三重県齋宮跡調査事務所1984

IV 結 語

今回の調査で、最も大きな成果が「水司鴨□」とへう描きされた土器の発見である。齋宮跡の調査は古里遺跡の調査を含めて12年目になるが、今回初めて『延喜式』記載の齋宮寮十三司の一つ、水部司の場所の手掛かりをつかむことができたわけである。また、カモ県主の系譜をひく鴨氏は、代々中央官制における主殿寮及び主水司の殿部、水部として、その職掌を世襲していたとされており、齋宮でも中央官制と同様水部司には中央から派遣されてきた鴨氏がこれに関与していたものと推察される。^(註1) 現段階で検出された遺構から、奈良時代の水司の場所を今回の調査区に想定するには、直接これと結びつく遺構に乏しいため、なお検討を要するが当地区を含めた一帯が水部司の所在した可能性の強い場所としてとらえておきたい。

次に区画溝や古道の発見である。最近宮域東部において、トレンチ調査や面調査によって、平安時代前半及び平安時代末葉～鎌倉時代の区画溝が次第に明らかとなってきたが、宮域の北東部でもその一端を窺い知ることができた。そしてこの区画は、奈良時代末葉から平安時代初頭頃の溝 S D 2438 に沿うような形で、南北溝 S D 2475 や、古道 S F 2419 が検出されており、平安時代を通じて大きな変化がなく、地割が根強く意識されていたものと思われる。一方、齋宮北辺を古道が走ることが確認されたことによって、今後そのつながりが注目される場所である。さらに古道は北へも延びており、宮域の広がりという点で新たな検討課題が一つ付け加えられた。

次に掘立柱建物についてであるが、S B 2443・S B 2468・S B 2483などの三面廂付建物の検出例は、今回が初めてであり、また南東隅に土壇を設けるという点でも、今までに検出された掘立柱建物には見られなかったものである。こうした施設をもつ建物は、最近中世村落の調査例が増加するにつれて、県内各所で見つかりつつある。例えば、上野市大内北堀池遺跡、鈴鹿市郡山町末野 C 遺跡、松阪市久保町草山遺跡、伊勢市中ノ垣内遺跡などで検出例がある。すべて総柱建物の一隅に土壇を設けるという点で共通しており、^(註2)^(註3)^(註4)^(註5) 時期的には、北堀池遺跡、末野 C 遺跡の建物が平安

時代末葉に、中ノ垣内遺跡の建物が鎌倉時代前半に、草山遺跡の建物が鎌倉時代中葉～室町時代に位置づけられている。なお南東隅の土壇の性格については、草山遺跡では、古い民家の例から「厩」ではないかと考えられているが、これまでに検出された土壇内出土土器を見ると土師器皿・甕、山茶椀、山皿など中世の日常雑器が多く、厨房的な施設とか食堂のような機能をもった施設とも考えられ、単純に「厩」と考え難い状況がある。

ところで伊勢市中ノ垣内遺跡や松阪市草山遺跡の例では、総柱建物の各柱掘形内に根石が認められており、鎌倉時代中葉～後半とされる伊勢市中新田遺跡や室町時代とされる松阪市射原垣内遺跡の総柱建物も同様であるところから、総柱建物から根石をもつ総柱建物への移行期を一応鎌倉時代前半頃と考えたい。
(註6)
(註7)

一方、今回検出された掘立柱建物の方向を見てみると、平安時代中葉・末葉とも北に対して東へ10°前後偏るものが多く、こうした傾向は、北に対し西へ0°～5°偏る建物が多い宮域中・東部の様相とは異なり、宮域周辺部の様相と類似している。そして平安時代末葉に至っては、掘立柱建物S B 2443・S B 2468・S B 2483のごとく、中世村落としての建物の出現により、もはや当地区は、この時期に官衙としての性格を失っているものと思われる。

註1. 井上光貞「カモ県主の研究」『日本古代国家の研究』 1965

註2. 『北堀池遺跡発掘調査概要II』三重県教育委員会 1979

註3. 中森成行『末野C遺跡調査概報』鈴鹿市遺跡調査会 1979

註4. 『草山遺跡発掘調査月報No.8』松阪市教育委員会 1984

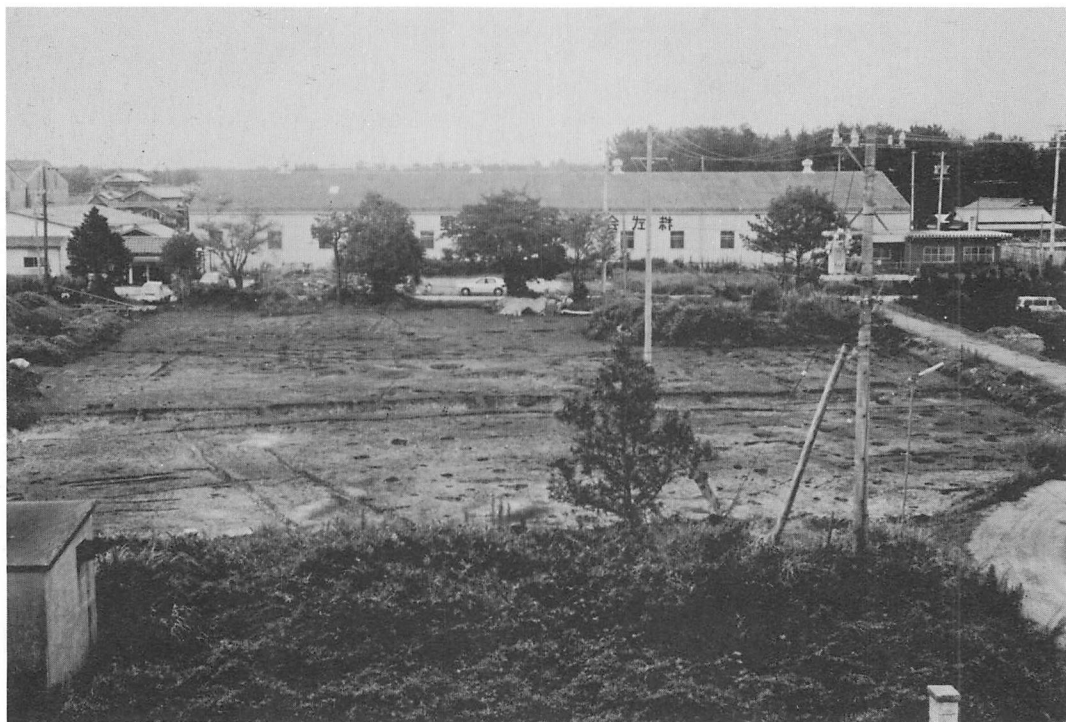
註5. 中ノ垣内遺跡現地説明会資料 1983

註6. 新田洋「中新田遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1982

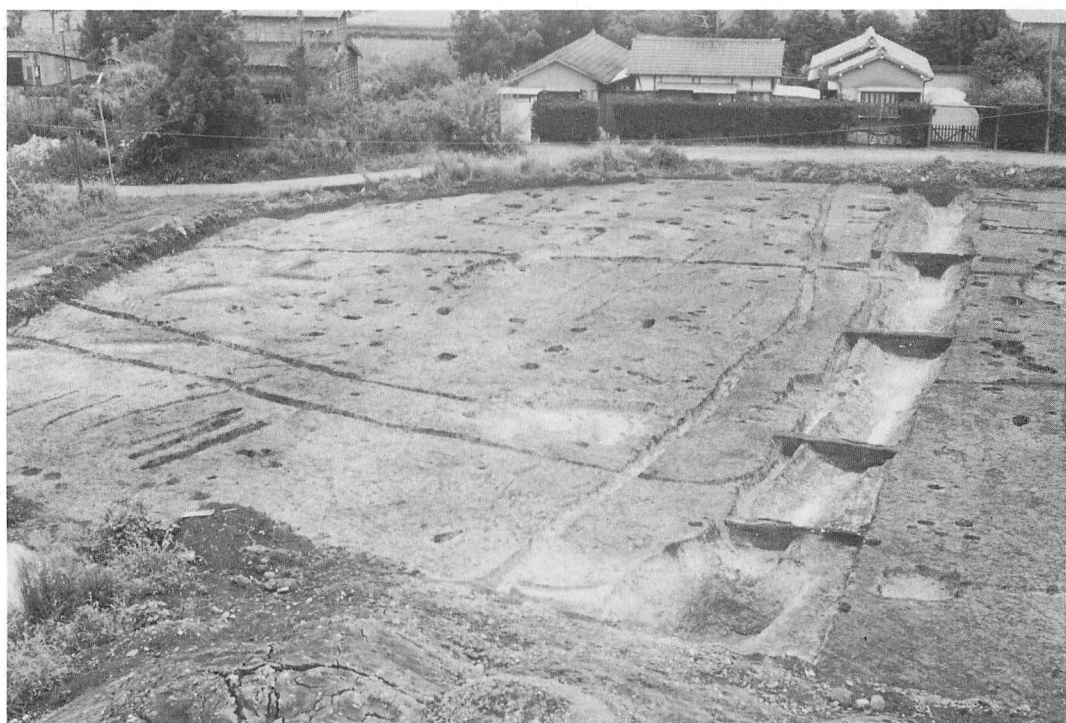
註7. 下村登良男『射原垣内遺跡発掘調査概報』松阪市教育委員会 1982

圖 版

PL. 1



南半部全景（東から）



南東部全景（北から）



南西部全景（北から）



S B 2486 S B 2487 S B 2488（北から）

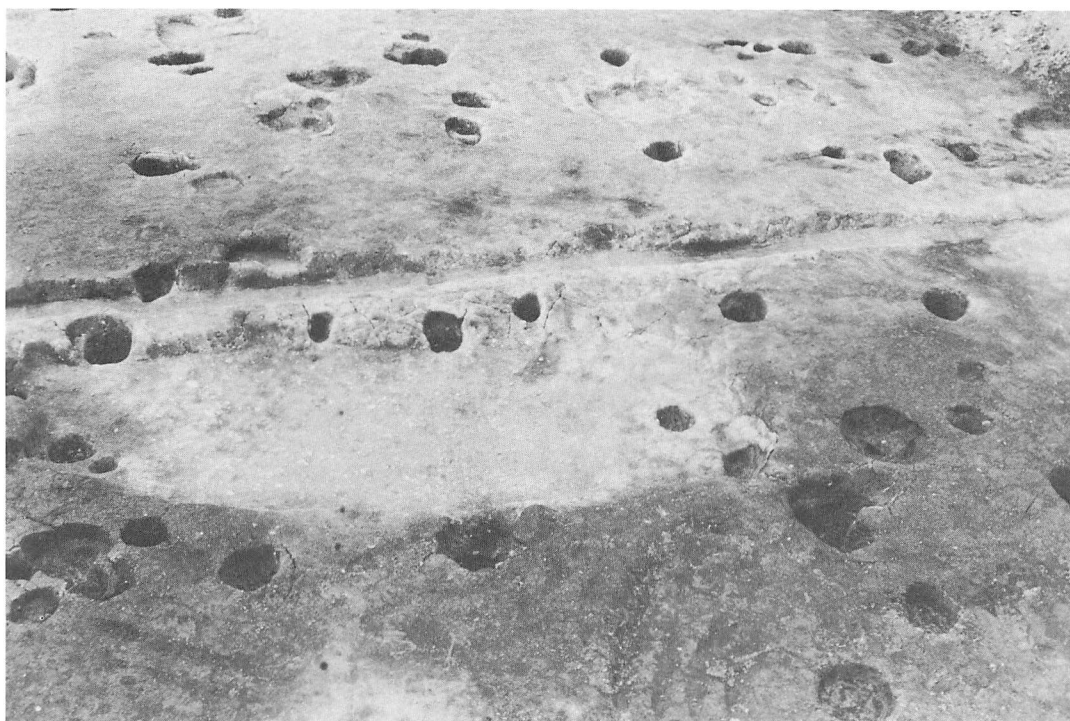
PL. 3



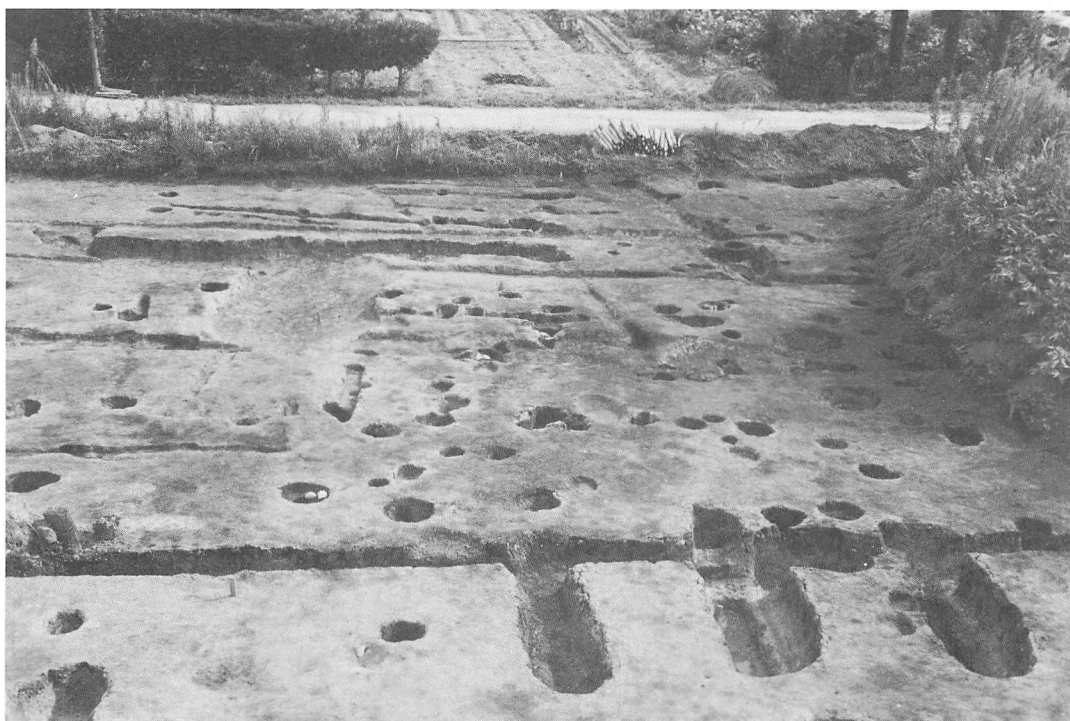
SB2446 SB2447 SB2448 (北から)



SB2449 SK2450 (西から)



S B2443 (東から)



S B2468 (北から)

PL. 5



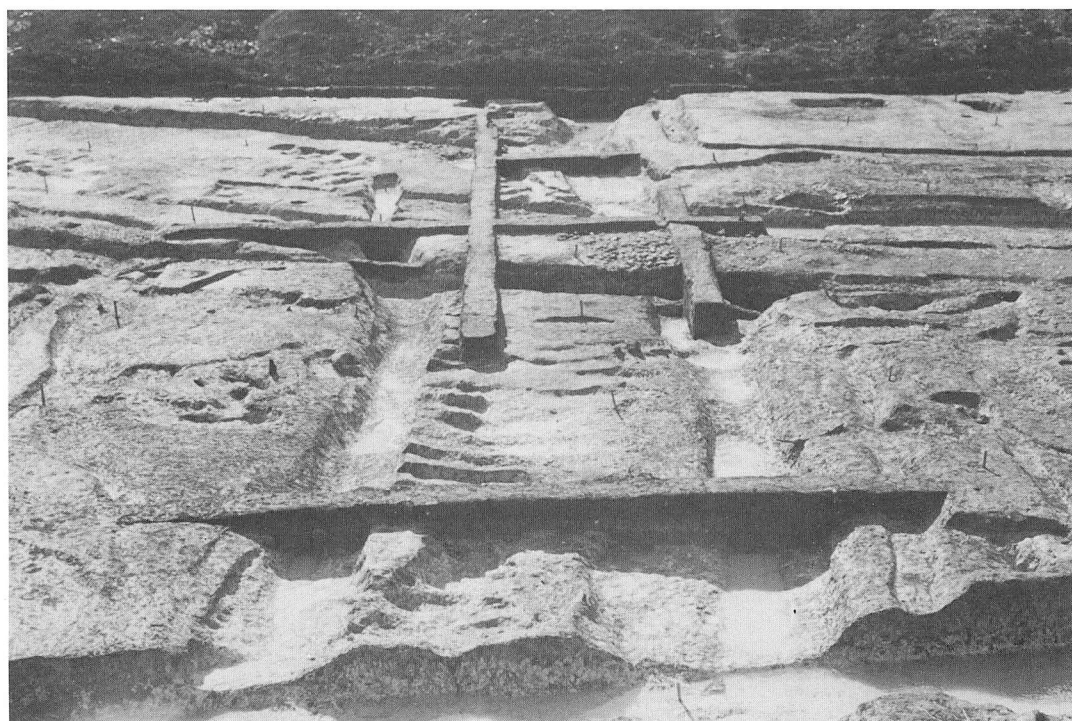
北半部全景（北から）



SD 5 SD2415～SD2418 SF2419（西から）



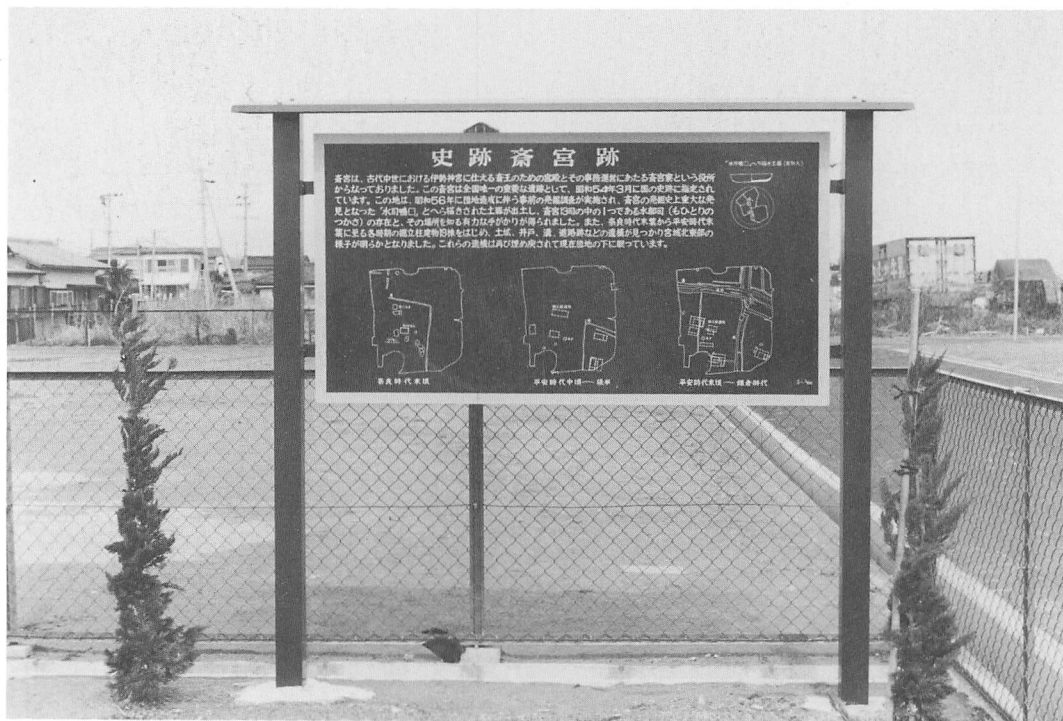
S F 2419 S F 2427 (東から)



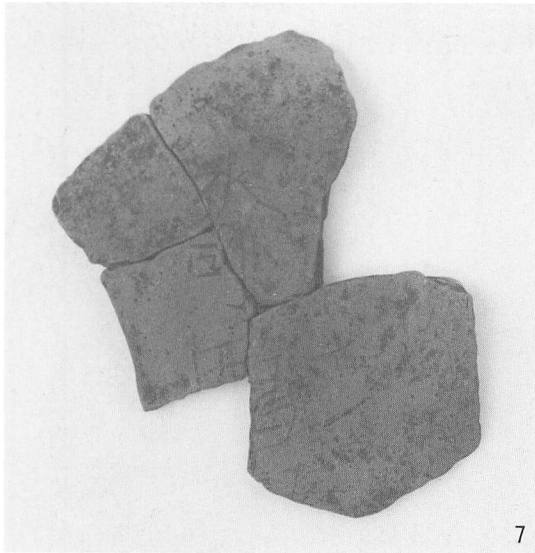
S D 2425 S D 2426 S F 2427 (北から)



S B 2479 (北から)



団地内小公園に立つ説明板



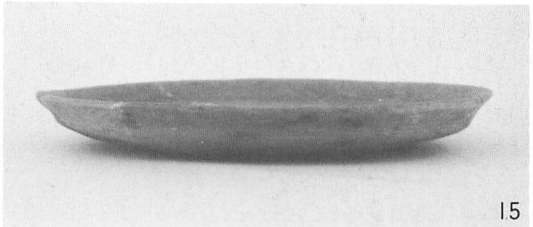
7



8



9



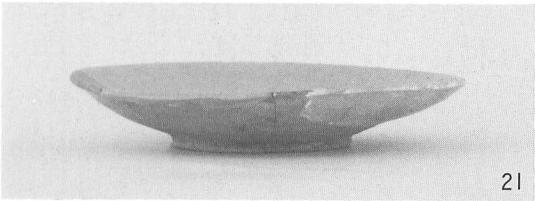
15



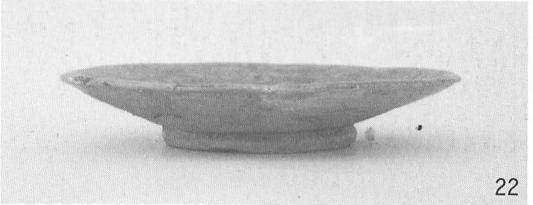
16



20



21



22



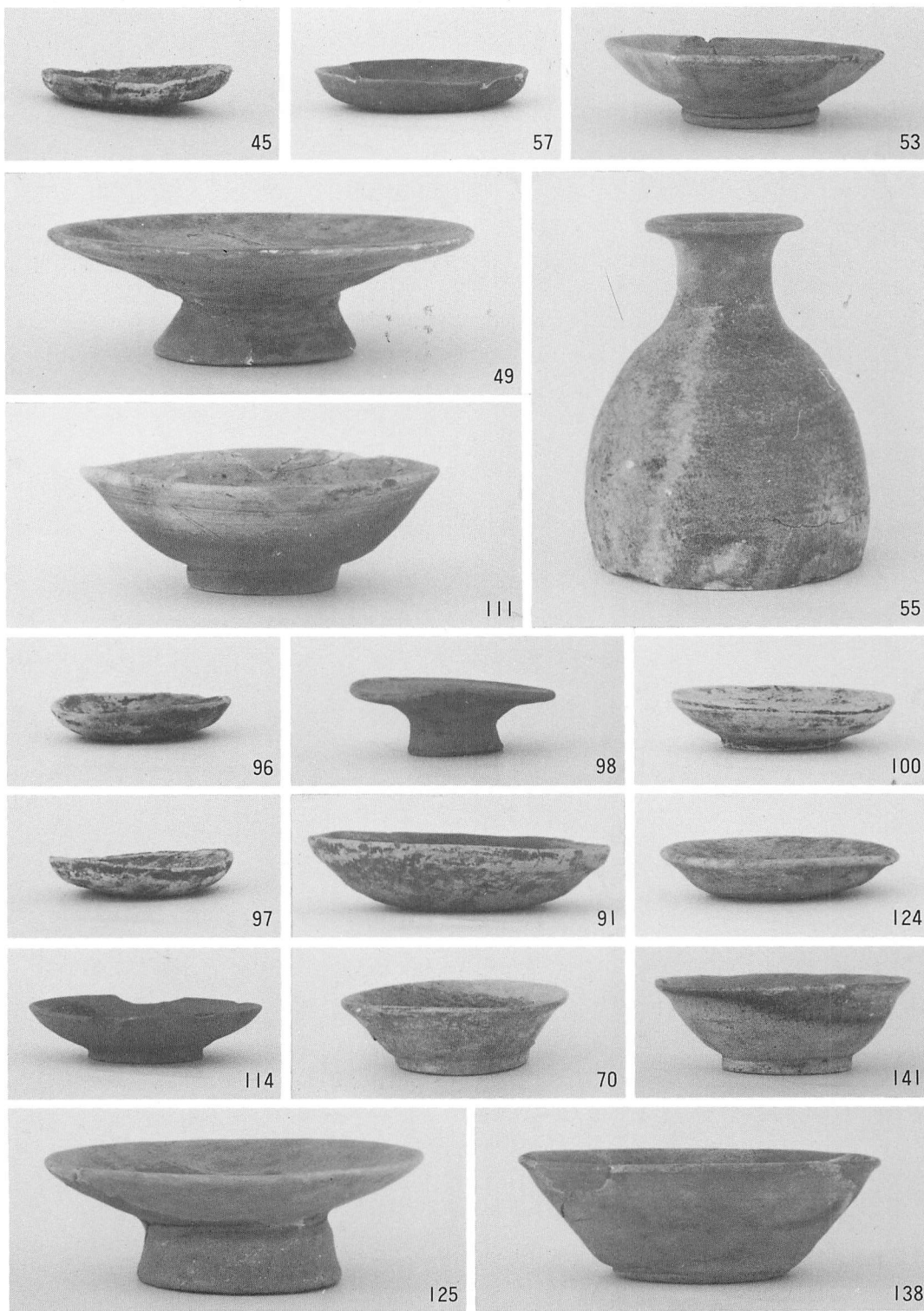
41



50

遺物写真 (1 : 3, 7のみ1 : 2)

PL. 9



遺物写真(1:3)

第37-4次遺構実測図(1:200)



第37-4次遺構実測図 (1 : 200)

史 跡 齋 宮 跡

第37－4次発掘調査報告

昭和60年3月

編 集 三重県齋宮跡調査事務所
発 行 明 和 町
印 刷 光 出 版 印 刷 (株)

本書は、明和町及び三重県齋宮跡調査事務所
の許可を得て、齋宮研究会（代表服部貞蔵）が
増刷したものである。

